

C—1 家族循環と生活費

—とくに食料費を中心として—

お茶の水女子大 伊藤 秋子

1. 目的 家族循環が家計にどのような影響を与えるかを，家庭経済の立場から分析する。ここでは家族循環のモデルを作り，これに応ずる食料費の変動をみることにする。

2. 方法

(1) 人口統計に基づいて、子供数と出生間隔の異なる9種の家族循環のモデルを作成する。

(2) 食料費は性・年齢別所要熱量を基にし、また、総理府統計局：家計調査による購入価格を用いて、1 Cal 当りの費用を求め、これを家族循環に適応させる。

3. 成果

(1) 子供数が多いほど家族循環中の最大所要熱量は大きくなる。(2) 所要熱量の最大となる時期は、父43~53歳であり、子供数が少ない程、また出生間隔が短い程、この時期は早い。(3) 1カ月間の食料費の最大となる時期は所要熱量の場合と同じであるが、その金額は2子の場合20,860円、5子の場合出生間隔の差異により、34,210~36,116円にわたる。(4) エンゲル係数の最大の時期は、所要熱量の場合に準ずるが、その値は2子の場合48.2~49.2、5子の場合78.8~83.7となる。子供の成長期には家計における食料費の負担はとくに大きい。この負担の重さやその時期は子供数と出生間隔により異なる。家計が生活水準の向上を図るには、出生計画、消費構造の合理化、家族循環に応ずる生活設計を図ることが必要である。